

構成員からの主な御意見

1 気象状況や生産技術動向等からみた今年の10a当たり収量への影響及びその見方

水稻生育期間となる夏（6～8月）の平均気温平年差は、北日本で+3.4℃、東日本で+2.3℃、西日本で+1.7℃となり、1946年の統計開始以降、夏として1位の高温となった。全国のアメダス地点で観測された猛暑日の地点数の積算は、現在と比較可能な2010年以降では、最も多かった2024年の8821地点を超えて、9385地点となった。また、全国153の気象台等のうち132地点で、夏の平均気温が歴代1位の高温となった（9地点のタイ記録を含む）。

多くの地方で早い梅雨入りに続き、過去最も早い梅雨明けとなり、季節進行が早かった。7月は少雨が顕著となり、北陸地方では少雨の記録を更新した。一方で、昨年と同様に線状降水帯が全国各地で発生し、しかも降水帯の範囲が著しく拡大し、特に北陸地方と九州地方では、8月前半に記録的な大雨となったところがあった。

・記録的な高温の継続は、穂数、一穂粒数、出穂期の早期化、そして高温不稔、千粒重、登熟や白未熟粒など品質の良否に広く影響する。これらは収量に対して複合的に影響すると思われるが、特に整粒の歩留まりに関わる事項が注視される。

・7月から8月にかけても全国的に記録的猛暑が続いたことから、登熟期に高温に遭遇した地域では品質低下が懸念され、向こう1か月の予報でも全国的に70～80%の確率で平年より気温が高いことから、品質の低下とそれに伴う歩留まりの低下に注意が必要である。

・高温傾向で出穂期が早まっていることに加えて、7～8月にわたって昨年に引き続き高温が継続しているため、幅広い作期や品種で登熟気温が高くなり、白未熟や胴割れなどの多発による品質低下の懸念がある。

・現在収穫されている地域では出穂後20日間の平均気温が26～27℃以上で推移していたこともあり、高温障害による品質低下（白未熟粒、胴割れ）が発生する可能性があり、注視が必要になる。

・東日本、西日本で9月下旬も高温のまま経過すると、登熟が進行し、収穫期が早まると予想される。高温によって、千粒重の低下、不稔粒の増加、収量の低下、等外格付けによる収量低下が報告されているが、高温は多照を伴う場合が多く、高温が収量に及ぼす影響は明確ではない。高温障害対策として灌漑水の掛け流しや、適量の穂肥等が指導されているが、十分な効果があるか検証する必要がある。

・高温が続いたことで、生育期間が短縮される可能性とそれに伴う粒数の確保への影響が考えられる。

・本年は降水量の変動が大きかったことから、生育時期、地域ごとの降水量の収量に対する影響が注視される。

・降水量は、梅雨期間も短く、北・東日本でかなり少なかった。しかし、渇水による水稻栽培への影響は限定的であったとみられる。

2023年に高温、乾燥となりフェーンの影響の大きかった北陸など日本海側では、今年は6、7月に高温、多照で推移し、7月までは降水量は平年より著しく少なく、肥料ぎれによる分げつ数、穂数、1穂穎花数に及ぼす影響を地域、早場米、遅場米など移植時期、品種の早晚性、緩効性肥料、追肥などの肥培管理の違いを考慮し、注視していく必要がある。

9月以降も高温が継続するという予報であり、引き続き高温の影響について留意していく必要があるとともに、台風が発生や集中的な豪雨などについても注意が必要である。

広範囲にわたる記録的猛暑と少雨により、特に、東北・北陸等では渇水による生育阻害や枯死が収量に影響しなかったか注意が必要である。

昨年的高温による品質低下により、全国的に高温耐性品種への置き換えが進んでいると推察され、その効果が注視される。

2024年に群馬、埼玉はじめ多くの都道府県で被害をもたらしたイネカメムシは今年、東北はじめさらに被害域が拡大することが懸念される。

構成員からの主な御意見

2 水稻の収穫量調査等の実施に当たっての留意事項

6月以降の高温・多照、渇水による収量構成要素への影響。高温、渇水による収量減少、高温障害による品質への影響。

8月以降の台風などによる豪雨、とくに線状降水帯にあたった地域の倒伏、冠水が収量、品質に及ぼす影響。

高温耐性品種と感受性品種における高温障害米発生の相違。また、高温不稔と登熟障害は分けて考える必要。

記録的な高温の継続の中で、生育期間の短縮に伴う収量への影響、出穂期の不稔発生と、登熟期の白未熟粒の発生、千粒重低下、割れ米の発生など整粒歩留まりに関わる事項に留意。

渇水の影響による枯死、豪雨による影響に留意。

高温傾向で班点米カメムシ類、特にイネカメムシの発生が多いと予測される地域が多く品質・収量への影響が懸念され、留意する必要。

生育期間の短縮に伴う籾数確保への影響、出穂期の高温による開花期高温不稔の発生、登熟期の高温による品質低下について、引き続き注意が必要。

近年の海水温上昇に伴う日本近海での台風の発生や前線の活動の活発化により、収穫前の水田の冠水やイネの倒伏による収量への影響に注意が必要。

大雨・冠水等の被害を把握するために、共済の情報を把握する必要。

構成員からの主な御意見

3 その他(本年の生育で特徴的な事柄等)

生育期間を通して猛暑で高温が継続するような気象状況が今後も続く予想され、加えて渇水や豪雨の局地的な集中が増加していくと思われ、このような状況で生産を安定させていくための方策がますます重要となる。

本年の生育期間中の温度範囲は、これまでの収量予測式の元となる過去の気象データの温度域を超えつつあること、また、高温耐性品種への転換が進むことにより予測式のパラメータ等が変わる可能性があることなどから、予測式の検証、予測結果の検証にさらに注力する必要があるかもしれない。

今後、高温で経過した場合、白未熟粒発生による整粒歩合の低下が予想されるが、精米歩留まりの低下により、2023年白米販売数量の減少要因となったことを考えると、等級に応じた精米歩留まりの予備的測定も必要となるかもしれない。

本年の夏季の高温は昨年度以上のレベルであり、このような気象条件の継続の可能性をふまえ、高温耐性品種の導入等、長い目でその影響を注視する必要がある。